中学校学習指導要領に基づく言語能力Can-do statementsの開発

小野塚若菜（ベネッセ教育総合研究所）・泰山裕（鳴門教育大学）

①開発の目的

言語能力は**すべての学習の基盤となる資質・能力**であり，**教科横断的に育成される力**であるとされる（平成29年告示学習指導要領）が，教科横断的な視点での議論は十分ではない。

言語能力を教科横断的に育成することを目指し，その目標・指導・評価のフレームワークとして言語能力Can-do statements（Cds）を開発

②Cdsの構成と開発手順

（1）国・数・理・社の学習指導要領解説の学習活動記述から，思考スキル※が抽出された箇所を分類し，思考スキル別に各教科・教科横断の記述に抽象化

（2）（1）を思考スキルの共起頻度（小野塚・泰山，2021）を参考に記述文に反映（Z・A列）

（3）探究的な学習の過程【課題設定・情報収集・整理分析・まとめ表現】（X列）にカテゴリ化，教科横並びに整理

（4）各教科Cdsの記述（A列）を教科間で比較しながら類似した概念に分類，その分類ごとに抽象化し教科横断Cdsの記述（Y列）を記す

（5）各教科担当者による検証

表1：Cdsの一部

X 探究のプロセス	Y 教科横断的な目標としてのCds	Z 思考スキル※	A 各教科における汎用的Cds	B 各教科の単元例
情報収集	#06 複数の情報を目的に沿って整理することができる	分類する 比較する 多面的にみる	◆国語：媒体の特性を踏まえ，複数の情報を整理しながら適切な情報を得ることができる ◆社会：調査や資料，交流から収集した情報を精選することができる	（省略）
整理・分析	#09 情報を整理し，焦点化する内容を特定することができる	焦点化する	◆国語：集めた情報のうち，必要なものに焦点化することができる ◆理科：与えられた情報・実験観察結果から，さまざまな情報から着目するポイントを見出すことができる	（省略）

※泰山裕（2014）思考力育成を目指した授業設計のための思考スキルの体系化と評価

Cdsに求められる要件

a. 各教科の学習プロセスをある程度適切に反映できていること
b. 各教科を横並びで比較することが可能であること
c. 各教科の具体的な指導のイメージと，それがひもづく教科横断的な能力をイメージすることが可能であること

③教科担当者の解釈から考察する成果と課題

4名（各教科担当者1名）へのグループインタビュー

教科横断的な目標としてのCdsに関する意見

- ✓ 教科を横並びに見て他教科と共通点があると思ったときに，自身の教科は全体の中でこういう役割を果たすのだというように，視座が高くなった。
- ✓ 教科別・単元別だけだと，資質能力をその範囲のみで捉える。それを超えていけると他の人にもわかりやすくなり共通認識が持ちやすくなると思う。
- ✓ 教科横断で見ることで，教科特性も見えてきた。

能力記述文の改善に生かしたい意見

- ✓ 教科横断的な目標としてのCdsの能力記述文は，その教科の領域や分野によって，必要な能力であったりそうでなかったりする。
- ✓ 能力記述文のいくつかの項目は，記述文の前半と後半で異なる要素が含まれていると感じる。

成果

Cdsの整理によって，各教科担当者が言語能力の目標・指導・評価を**教科横断的な視点で捉えることに貢献**できた

課題

一部の能力記述文は，
- ➢ **汎用的な表現**になっていない可能性
- ➢ 表現されている能力が**適切な粒度**でない可能性

④今後の検証計画

Cdsの妥当性・有用性の検証

Cdsは正しいものであるか
- 各教科の学習過程をある程度適切に反映できているか
- 学力調査問題との整合性は

Cdsは役に立つものであるか
- Cdsを用いて言語能力に焦点化した指導計画を立てられるか
- Cdsを用いて生徒評価はできるか

精緻化により，Cdsは，**言語能力の到達目標・指導内容・評価観点の規準**の3つの役割を担う